

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和3年 7月29日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	栗山侑子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
芦生研究林	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
動物園科学基礎論	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
令和3年7月19日 ~ 令和3年7月21日 (3日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
京大フィールド研 森林育成学分野 石原正恵准教授、芦生研究林技術職員 柴田氏・太田氏	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
異なる気候帯の植生や、獣害(特に鹿害)による植生の変化及びその対策、植生回復の経過を学ぶことを目的として、芦生研究林において3日間の実習を行った。芦生研究林は、学術研究及び実地演習を目的として設定されており、天然林や二次林を有している。	
スケジュール 7/19(月): 芦生演習林についてのガイダンス 構内の希少種見学・トロッコ沿いの散策(暖温帯林構成種観察) 7/20(火): シカ害・クマはぎの観察(うつろ谷・モンドリ谷でのシカ柵の観察、修繕) 7/21(水): 藤原氏のご講演	
芦生研究林についてのガイダンスでは、芦生研究林の歴史・概要及び、芦生希少植物域外保全プロジェクトといった現在行われているプロジェクトについての説明をしていただいた。現在芦生研究林ではシカによる食害が深刻であり、その対策として保護柵の設置や危機に直面している希少植物種の域外保全が行われているほか、世界100カ所で行われているプロジェクトである「LIFEPLAN」に日本で唯一参加しており、林内各地に設置されたカメラトラップや音声ロガー等による調査が行われている。	
	
左: LIFEPLANの様子	右: 域外保全(タヌキラン)
トロッコ沿いの散策では、暖温帯林構成種について学んだ。芦生研究林では、標高600m付近まではウラジロガシが多くみられるほか、アシウスギやリョウブ、クロモジといった樹木がみられた。また芦生研究林には属していないが、トロッコ沿いには人工林もみられた。この付近ではクマはぎの被害も深刻であり、その予防としてテープが巻かれていることが分かった。また、ここ数年は国産の木材需要が高まり、価格も上昇しているようだが、しばらくは採算が合わないことが続いていた。それゆえトロッコ沿いの人口林も今の樹木が皆伐されたあと、また新しく樹木を植えるかは分からないという。この場所はトロッコが使われない今、ハーベスタなどの機会が入れるような林道は付近には見当たらず、大変な重労働であることが予想され、このことも林業からの撤退を進める要因で、規制を緩和	

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

れる。人工林が放置されるとなると、ますますの森林衰退が懸念される。

鹿柵の見学では、集水域スケールで防鹿柵を設置しているうつろ谷とモンドリ谷を見学した。被害を受けてからそれほど年月が経っていない 2006 年にシカ柵を設置したうつろ谷では植生の回復は見られたが、2017 年に新たにシカ柵が設置されたモンドリ谷では、植生の回復は見られなかった。うつろ谷ではシカ柵を設置してすぐに植生の回復がみられたようで、植生を回復させるには、被害を受けてからすぐにシカ柵を設置しなければならないということである。モンドリ谷で植生が回復しなかった要因としては、下層植生が無くなったために、埋土種子が流されやすくなってしまったこと、また小動物も一部排除されているため、シカ柵の外からの新たな種子の供給も少ない可能性があることが考えられる。

また、長治谷でのシカ柵の設置の様子も見学させて頂いた。ここではシカの不嗜好性植物であるイワヒメワラビとイグサばかりになってしまっていた。一方シカ柵内では、シカの大好物であるアシウアザミをはじめとした植物の回復もみられたが、これらの植物の植生回復の範囲は 1 年で 5m と非常に狭く、今後この一帯を回復させるだけでも何十年もかかるという。ここでは数日前にシカが侵入したようで、シカ柵の修繕も体験させて頂いた。せっかくシカ柵を設置して何年もかけて植生を回復させても、たった一度のシカの侵入でまた多様性が失われてしまうという厳しい現状も目の当たりにした。また、シカ柵の設置・維持管理には多大な費用とマンパワーを必要とするため、なかなか広範囲の植生の保全は難しいとのことだった。



左：うつろ谷 シカ柵内の様子



真ん中：モンドリ谷 シカ柵内の様子



右：クマはぎの被害木

田歌舎を経営し、自給自足の生活の発信も行われている藤原氏の講演では、現場の方から見た森林や農地への獣害の現状のご説明や、今行われている防護策への意見を中心にお話しいただいた。藤原氏は、「シカを獲ることは鹿害対策として意味がない」とはっきりおっしゃったことが驚いた。勿論狩猟が根本的な解決策ではないことや、継続しなければ意味がないことは承知していたが、今現在の抑制には効果があると思っていたからだ。ただ、高台寺国有林野比叡山など、京都には狩猟が許可されない社寺有林が多く、狩猟以外の対策を模索することは非常に重要なことである。ここでは村全体で管理した犬を放し飼いにするという案がでていたが、たとえこれが有効であったとしても実現は難しいのではないだろうか。村単位でこの案を通すにしても、これは過半数の賛成ではなく、住民全員の賛成が必要だと私は思う。また、最近ジビエが流行しているが、これは逆にシカを増やす恐れもある。藤原氏のように、自分たちの生活と田歌舎に訪れたお客に提供する分を獲って食べる、という分には問題はなく、むしろ人々の経験としても素晴らしいと思うが、市場への流通が盛んになれば、シカを囲って増やすような業者が必ず現れるはずである。

今回の実習では、野生動物・自然と人との共生の難しさ、一度失われたものを取り戻すことの難しさを改めて突き付けられた。今後私は研究者的な視点から、現場の声を大事にしつつこれらの問題について考えていきたい。

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS より支援を受けて遂行できました。PWS プログラム及び、受け入れてくださった芦生研究林のみなさま、藤原様に心より感謝申し上げます。